

サハリン島

映画文学人生論

アントン・チェーホフ1860-1904)

『サハリン島』(1895)

『かもめ』(1896)

『三人姉妹』(1901)

『桜の園』(1904)

参考：吉村昭『間宮林蔵』(1981)東京新聞

サハリンはオホーツク海にあり、ほぼ一千キロに及ぶシベリア東部海岸と、アムール河口への入り口とを、大洋から遮っている。

日露戦争が勃発したのは明治三十七年(1904)だが、その五年前の明治三十二年(1899)四月から十二月にかけてチェーホフは樺太を調査した。チェーホフ自身は好戦的なタイプの人物ではないが、後方支援のかたちで戦争準備に協力したのかもしれない。

サハリンはオホーツク海にあり、ほぼ一千キロに及ぶシベリア東部海岸と、アムール河口への入り口とを、大洋から遮っている。

サハリンというのはロシア人の呼び方で、日本人は樺太とよんでいた。昔はアジア大陸と地続きの半島と考えられていたが、文化八年(1882)間宮林蔵の海峡発見により島であることが確認された。そのため、チェーホフは、調査見聞記を『サハリン島』として発表している。

サハリン島がどの国に帰属するかという問題については、明治八年(1875)の樺太・千島交換条約で、樺太はロシア領、千島は日本領と定められた。その後、日露戦争の結果、樺太の南半分は日本領となったが、第二次世界大戦の結果、昭和二十年八月以後は、北半分も南半分もすべてロシア領だ。

しかし、本書によれば、もともとは先住民のギリヤーク人の島だったという。ギリヤーク人は、

サハリン島

映画文学人生論

モンゴルとも違ふし、ツングースでもなく、ある未知の種族に属しており、今では少数の優秀で勇敢な民族として、ごくささやかな土地に、最後の時代を生き終えつつある。まれに見る社交性と移動性のため近隣のあらゆる民族と血縁関係に入っており、今や、モンゴル、ツングース、アイヌなどの血のまじらぬ純血のギリヤーク人に会うことはまず不可能だとチェーホフはいう。

百二十年前に彼がそう書いているが、二十世紀の現在も絶滅せず、純血種の子孫が細々として暮らしているといわれる。その血はわずかながら混血により私にも伝わっているような気がする。

ギリヤーク人の性格は、好戦的でなく、論争や喧嘩を好まず、どの隣人とも平和に折り合っている民族だという点では、だれもが一致している。彼らは勇敢で、呑み込みが早く、陽気で、親しみやすく、有力者や金持といっしょになっても、気がねをしない。自分の上には一切の権力を認めないし、目上とか目下の概念もない。

ギリヤーク人は決して顔を洗わないため人類学者ですら、彼らの本当の色が何色なのか断言しかねるほどだ、下着も洗わないし、毛皮の衣服や履物は、まるでたった今、死んだ犬から剥ぎとったばかりといった様子だ。ギリヤーク人そのものも腐った魚のアラなどの、不快な、時には堪えられぬほどの悪臭を放つ。

燭の灯を煙草火としつチェホフ忌 中村草田男